

これらのテキストは二〇一一年に書かれたものだが、それはヨーロッパにおける蜂起の元年で、わたしにとつては単に経済的というだけでなく、社会的想像力が危機に瀕し、ヨーロッパの社会が深刻な状態に陥った時期のことだ。ここ三十年というもの、経済的なドグマが世論を支配し、政治的理性の重要な力を破壊してしまった。グローバル経済の崩壊は、経済における教条主義の危険性を露わにしたが、けれどもすでにそのイデオロギーは、生きている社会のなかにオートマティズムとして組み込まれてしまっていた。

政治的な意志決定は、相互接続されたグローバル機械に埋め込まれた技術―言語的オートマティズムに置き換えられ、社会的な選択は、社会的言説や社会的想像力に組み込まれた精神的オートマ

ティズムに委ねられてしまっている。

しかし、崩壊に象徴されるカタストロフィーの深みは、社会的な脳の秘められた能力を目覚めさせることになる。二〇一〇年十月、ロンドン、アテネ、ローマではじめて垣間見ることができた暴動の発生は、金融崩壊によって徴されたもののだが、「翌年の」五月、六月のスペインのアカンパ、ダ「キャンペーン、野営」の意味の、イギリス郊外の八月の四夜の暴動「イングリランド暴動。八月六日、から十日にかけて起こった」、そしてアメリカのストライキやオキュパイ運動の波というように、ますます大規模なものになっていくことになる。

ヨーロッパの崩壊は、単に、経済や金融という意味での危機によつてもたらされるのではなく、未来に対する想像力の危機によるものでもある。マーストリヒトの規則は疑いようのないドグマ、アルゴリズム的な公式、魔術的な呪文として、欧州中央銀行の高僧によつて守られ、株式仲買人や投資顧問たちによつて推し進められている。

金融権力は、不安定な認知的労働、つまり、身体から乖離させられた今日の一般的な知性を搾取することに基づいている。

今日の一般的な知性は、断片化されていて、自己認識や自己意識を疎外させられている。一般的な知性のエロティックな身体を、意識的に動員したり、詩的なたちで言語を再活性化することだけが、新しい、社会的な自律性を出現させる路を切り拓くことになるだろう。

## 不可逆性

わたしの世代の人間にとっては、弁証法的なハッピー・エンディングという、知的オートマティズムから抜け出すことは困難だ。

そう、ウィーン会議が掲げた状況回復に続いて、一八四八年の諸国民の春が起こったように、あるいはファシズムに続いて、レジスタンスや解放が起こったように、現在、わたしの世代（六八年世代、ある意味で最後の近代的世代）の政治的直感は、民主主義や社会的連帯の回復、そして金融独裁の逆転が起こるのではないかと期待している。

こうした期待は偽りのものなのかもしれない。わたしたちは、歴史的進化の概念的な枠組みを断念し、不可逆的な展開を想像できるようにするために、歴史を予見するための空間を強化する必要がある。今日のバイオ・エコノミー的な全体主義の圏域においては、記号資本によって生み出された技術—言語的なオートマティズムが組み込まれることで、身体に作用する外的な支配の形式ではなく、社会的身体、それ自体の変異が生み出されている。これこそが、歴史における弁証法が、過程や展望を理解するレヴェルにおいて、もはや機能できていない理由なのだ。不可逆性の展開は、破壊の展開に置き換わりつつある。だからこそわたしたちは、こうした視点から自律の概念を再考

しなくてはならないのだ。

「不可逆性」は、近代の政治論議のなかではタブーとされている言葉だが、というのもそれは、出来事の流れに対する合理的な統治の原理、つまり合理的な統治の必要条件や、近代政治の理論や実践に対してヒューマニズムが果たしてきた重要な貢献と、矛盾することになるからだ。マキャベリは、君主について、歴史の女性的側面であるフ、オルト、ウ、ナ（偶然、混沌とした出来事の流れ）を征服することができる男性の力というように語っている。

情報圏が果てしなく加速していく時代のなかで、わたしたちがいままさに経験しつつあるのは以下のようなことだ。女性的なフ、オルト、ウ、ナは、これ以上、政治的な理屈に基づく男性的な力に服従し、飼い慣らされているようなことはない。なぜならフ、オルト、ウ、ナは、過密になった情報圏や、金融におけるマイクロ・トレーディングのカオスな流れのなかで具現化されているからだ。新しい情報の到着率と、その意識的な処理を可能にする制限された時間とのあいだの不均衡は、非常に複雑な状況を生み出している。そのため、社会全体を合理的に変化させようとするようなプロジェクトには、出番がないのだ。

わたしたちの時代の地平は、福島が出来事によって徴されている。地震や津波のような騒然とした大惨事と比較すると、東京の静かな黙示録はもつと恐ろしいものだが、それは、惑星上の日常世界における、社会的な希望の新しい枠組みを示唆するものでもある。その大都市は、福島の放射性

降下物に直に曝されているにもかかわらず、生活はそのまま正常なたちで進行している。街を後にしたのは、一握りの人々に過ぎない。ほとんどの市民はそのままそこにとどまり、いつもそうするようにミネラルウォーターを買い、いつもそうしているように、円をマスクで覆い、呼吸しているのだ。数件の空気や水の汚染が告発された。食品の安全に対する意識は、米国当局に対して、日本からの特定の食品の輸入を停止するように促した。しかし、福島の影響が社会生活に混乱をもたらすようなことはなく、毒は日常生活の通常機能となり、わたしたちが暮らさなくてはならない第二の自然になったのだ。

過去数年の混乱は、惑星の光景をより掻き乱すことにはなったが、支配的なパラダイムの変化や、自己組織化の意識的な働き、あるいは革命的な大変動を生み出したわけではない。

メキシコ湾の原油流出は、BP 〔元 British Petroleum  
イギリスの石油会社〕 の追放をもたらしたわけではなく、むしろその力をより強固なものにするのだが、なぜならそれは、BPこそが唯一、混乱を手なづけ、うまくいけば、それを制御下に置くことができる権力だからなのだ。

二〇〇八年九月の金融崩壊は、アメリカの経済政策を転換させることにはならなかった。バラク・オバマの勝利による希望の昂まりにもかかわらず、金融階級が経済を掌握している手を緩めることはなかった。

ヨーロッパでは、二〇一〇年のギリシア危機以降、明らかに崩壊をもたらした元凶であるにもか

かわらず、新自由主義が退けられるようなことは起こらなかった。逆に、ギリシアの混乱（そしてそれに続く、アイルランド、イタリヤ、スペインそしてポルトガルの混乱）は、マネタリストの政策をより厳格にし、給与と社会的支出を削減するという方針を強めることになった。

システム上、変革は、正のフィードバックという形態をとっているのだ。

ノーバート・ウィナーのサイバネティクスに関する仕事によれば、システムの入力の変化に対して、変化を減らし、減衰させ、抵抗するように作用するとき、システムの出力は負のフィードバックによって決定されていることになる。もし、システム全体のフィードバックが負であれば、システムは安定するようになる。社会の場合を例にとれば、社会的な困窮が厳しく、広範囲に及んでいるとき、抗議や闘争が発生し、業界が、給与を増額し、搾取を減少することを余儀なくさせられるようになる。システムは負のフィードバックを示しているということになる。

ウィナーの言い方によれば、逆に、混乱に対して混乱の強度が増していくような反応は、システムが正のフィードバックを示しているということになる。言うまでもないが、意図しない正のフィードバックは、望ましいという意味での「正ポジティブ」とは程遠いものだ。自己強化のフィードバックについても同じことが言えるだろう。

個人的な印象では、情報が加速し、高度に複雑化していく状況のなかで、意識的かつ合理的な意志によって、そうした流れを調査したり調整したりすることができなくなっているため、流れその

ものが最終的に崩壊してしまうようなところまで、自分自身を強めようとしているかのようだ。右派勢力の選挙における勝利と、無知による独裁という悪循環を見てもらいたい。右派政党が勝利した場合、最初に興味を示すのは公的な学校教育を弱体化することであり、メディアを順化させるための介入なのだ。その結果、無知や順応主義が広められ、次の選挙での勝利がもたらされる、などなど。ヨーロッパの将来を、テクノ金融の権威主義と攻撃的なポピュリストの反応を混ぜ合わせた暗澹たるものとしてしか想像できないのはそのためなのだ。

このような状況における自律性は、本質的には、正のフィードバックのスイッチが入っている環境から逃げ出す能力ということになるだろう。惑星環境やグローバル社会が、ますますこうした悲惨な傾向に服従させられようとしているとき、どうしたらそれが可能になるのだろうか？

不安定さが社会的連帯を危機に陥れ、社会的身体活動を、組み込まれたいくつかの行動パターンへの繰り返しに減退させてしまうような、技術―言語的なオートマティズムが、社会的身体の間々まで配線されてしまっているような状況のなかで、わたしたちは、主体化のプロセスをどのように考えることができるのだろうか？

この本では、クリスティアン・マラッチィ 〔Christian Marazzi〕、パオロ・ヴィルノ 〔Paolo Virno〕、イタリヤの思想家 〔イタリアの思想家〕、マウリツィオ・ラツザラートの理論的な主張を、これまでにない方向に展開してみようと思う。これらの思想家は、言語と経済の関係を概念化し、愛情と言語という、生政治の圏域が、金融

資本主義に包摂され支配されていることを説明してみせた。わたしは、この包摂を破壊する方法を探し求めているのだが、詩と感性という通常とは異なる見地からそれを試みてみることにする。

## 群衆

社会的身体は、技術―言語的なオートマティズムによって限なく配線されると、群衆のように、つまりその挙動が、接続インターフェイスによって自動的に指図される集合的器官のように、動作することになる。

マルチチュードというのは、共通の志向性をもたず、共通の行動パターンを示すこともない、意識的で敏感な多数の存在のことだ。街のなかでごちゃまぜになっている群衆は、無数の異なる動機で、無数の異なる方向に移動していく。誰もがみな自分自身の道を進み、それらの動きが交差するところが群衆となるのだ。ときおり、群衆は調整されたやり方で動く。もうすぐ列車が発車しそうだから、一緒になって駅に向かい、信号では、一緒になって止まるのだ。誰もが、社会的な相互依存の制約のなかで、彼や彼女の意志に従って動いている。

もしわたしたちが、現在の社会的な主体性についてもっと理解したいならば、マルチチュードの概念を、ネットワークや群衆の概念で補完する必要があるだろう。